

副詞「どうやら」の史的変遷

川瀬, 卓
弘前大学人文社会科学部 : 講師

<https://doi.org/10.15017/2202929>

出版情報 : 語文研究. 124, pp.44-56, 2017-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



副詞「どうやら」の史的変遷

川 瀬 卓

1. はじめに

現代語において、「どうやら」は「ようだ」「みたいだ」「らしい」などと共起して〈推定〉を表す。

- (1) a. あそこにいるのは、どうやら太郎のようだ。
b. 朝から喉が痛い。どうやら風邪をひいたみたいだ。
c. どうやら彼は走るのが苦手らしい。

いずれも話し手が把握している状況から、それを証拠として別の事態を見出し、述べているものである。

しかし、「どうやら」はもともと〈推定〉を表していたわけではない。たとえば、近世前期上方語では〈推定〉は見られず、むしろ現代語では非文になりそうな文で、「どうやら」が用いられている。

- (2) 関平がけふ結たかみハ、どうやら^{せきへい}氣ミがわるひとと、びんかゞミひねくり、
なでなおしていらるゝところへ、(軽口機嫌囊1728・巻2)

結った髪がしっくりこないという感覚は話し手が直接的に感じ取っているものであり、別の状況を証拠として導きだした事態ではない。事態を不確定なものとして述べているという点では〈推定〉と共通するが、話し手が直接捉えた事態そのものについて述べているという点で〈推定〉と異なる。このように、「どうやら」はもともと現代語とは異なる意味を表す語であり、歴史的変化の結果、〈推定〉を表すようになったと考えられる。

「どうやら」はどのようにして〈推定〉を表す副詞になったのだろうか。これまで、現代語における「どうやら」の意味用法については多くの記述があるが、^(注1)「どうやら」の史的変遷を考察したものはほとんど見当たらない。本稿では不定語と助詞によって構成される副詞の一つである「どうやら」について、その周辺も考慮して史的変遷を明らかにしたい。^(注2)

本稿の構成は次の通りである。まず2節で「どうやら」の意味用法の歴史的変化について記述する。次に3節でその歴史的変化の背景について、意味変化の一般性、類義語の影響、「どうか」の史的変遷との関係という3つの観点から

考察を加える。最後に4節で本稿の考察をまとめる。

2. 「どうやら」の歴史的変化

2.1. 近世前期

「どうやら」は不定語「どう」と助詞「やら」によって構成される語である。不定語とは「なに」「だれ」「どう」「いつ」「どこ」など「欄が空である」という性質を持つもののことである（尾上2001）。「どう」は中世末から近世初期にかけて成立、発達する（柳田1978、迫野2002、荻野2003）。「やら」は係助詞「や」を含む「にやあらむ」から「やらむ」「やらう」「やらん」などを経て成立した助詞で、不定語に下接する「やら」（不定の「やら」）は中世にはすでに成立しているとされる（此島1966、山口1990、山口2000）。これらの組み合わせた「どうやら」は、近世から見られるようになる。

初期の「どうやら」においては、把握している事態について、その背後に存在する事態が不明であることを注釈、挿入的に付け加える次のような例が見られる。

- (3) 「そんなら皆様と是から別れますか。お名残惜しい。どうやら涙がこぼるゝ。」
（傾城壬生大念仏1702）

この例は「どういうわけか涙がこぼれる」と解釈される。「どういうわけか（よくわからないが）」という意味が「どうやら」によって付け加えられることで、ある事態について断定するのではなく、不確実な意味合いを帯びたものとなっている。^(注3)

このように、「どういうわけか（よくわからないが）」という疑いを表明することで、話し手の把握した事態を不確実なものとして述べることを表すものを〈感覚的描写〉と呼ぶことにしよう。「どうやらこうやら」の形で、手段や方法はどうであれ、ある事態が実現に至ったことを述べるものを除けば、近世前期上方語における「どうやら」は〈感覚的描写〉に限られていた。^(注4)

話し手に把握される事態は、話し手にとって内的なもの（内的な感情や感覚）と外的なもの（外的な状況）とに大きく分けられる。^(注5) (4) は内的な感情や感覚が感じられることを表している例である。^(注6)

- (4) a. おやじよろこび、^{ひらかた}枚方まで来りしが、どうやらこゝろもとなく、手をあけて見れば、（軽口御前男1703）
b. 其のやうに仰しゃれて。可愛がって下さる程どうやら心がうろたへて。死にともなう成りさうな（丹波与作待夜の^(注6)小室節1708・巻中）

(5) は話し手にとって外的な状況に対して、そのように感じられる、そのように思われるということを表している例である。いずれも知覚で捉えられた様子の描写になっている。

- (5) a. 是は―思ひの外早イ御帰リ。そしてどふやら御顔持も勝れず。早ふ様子が聞きましたい。(ひらかな盛衰記1740・第1)
- b. (送り主と送り先が書かれていない手紙の字を見て) 是は誰やら見た手ぢゃわいの。我らもどうやら見た手の風。ア、河内屋の与兵衛 ささゝ。
(女殺油地獄1721・巻下)
- c. あやしや血にそむ稚^{おさな}からだ。手にさはるをかきいだき。涙と共に撫廻し―。ハア、此着物はどふやら手ざはりもちがふ。そして何やらびら―とこんな物はめさぬ筈。合点がいかなとよく―すかし見。(ひらかな盛衰記1740・第3)

これらは単なる断定とは異なって「～であると感じられる」「～であるように見える」「～であると思われる」というような意味合いを帯びている。しかし、ある状況を証拠として別の事態を導く〈推定〉と異なり、知覚によって捉えられた事態そのままを描写していると見なせる。

このような「どうやら」は、疑いをもちつつ注釈的に用いられている「やら」句と連続的なものであると考えられる。

- (6) a. どうしたことやら此の比は一膳盛の客さへない。(丹波与作待夜の小屋節1708・巻中)
- b. 忠兵衛が内を出さまに延三折つつ入れて出て。何程鼻をかむやら戻に一枚も残らぬ。(冥途の飛脚1711・巻上)
- c. ハア気に入らぬやら返事がない。(女殺油地獄1721・巻上)

いずれも後続の句で表される事態に対して、その背後に存在する事態が不明であることや推測した事態が「やら」句で疑いをもって提示されている。「どうやら」はこのような「やら」句における「やら」の上接部分が「どう」になったものである。「どうやら」の〈感覚的描写〉は、事態がどのようなか不定であることを表す「どう」と、疑いを表す「やら」が組み合わされることで表される意味であるといえよう。

2.2. 近世後期

それでは、時代の下がった近世後期ではどうだろうか。上方語では〈感覚的描写〉を表す例は見られたが、〈推定〉を表すと積極的に判断できるものは見出

せなかった。

(7) a. 肝じんのあなたさまかお出なはらなんだサカイどうやら仏のない堂へ
参たやうにおました (南遊記1800・巻3)

b. **要** おはらだちは御尤しやが。それぎりにしなさるといふと。なにや
らみじゆくなやうじやござりませんか。そこはまーべんかんにんして。
よんでござうじ。どうやらあの子が丁簡あつてのやうにきこへます。
(色深狭睡夢1826・巻中)

(7a) は今の状況について、仏のいないお堂に来たように感じられるということ
を比喩的に述べている。(7b) はあの子なりの考えがあるようであるということ
を推定しているとも見られるが、一方で、明確な理由があるわけではなく、話
し手が感じたことをなぜかそのように思われるという形でそのまま述べている
ともとれる。

一方、江戸語においては〈推定〉と見られる例がある。以下の例は、現在把
握している状況から別の事態を導いている例と考えられる。

(8) a. 北八「急ぎ候ほどに、もふこれだ〜。サア弥次さんはいらねへか 弥
次「手めへさきへはいれ 北八「へ、どふやらはづかしいやうだ、
ハ、、、。(東海道中膝栗毛1802-1814・8編・下)

b. (相手の話を聞いて) 直兵衛「どうやら実説らしくもあり、又嘘らしい
ところもあるてナ (浮世風呂1809-1813・4編・巻上)

c. (誰もいない空き寺で、娘が四、五人の男たちに襲われそうになってい
る場面) どふやら私を手ごめにして、なぐさみでもなさるやふす、ど
ふぞ後生でござゐます。堪忍してお呉なさいヨ (春色梅児誉美1832-
1833・初編・巻2)

d. ^{うちうち}家内残らず其処に居るので。ハテとろ〜と遣つた間に飯も何様やら
済だやうす (七偏人1857-1863・5編)

(8a) は話し手が直接把握した様子を証拠として、直接把握することができない
他人の心情について述べたもので、相手が遠慮している様子から「恥ずかしい」
と相手が思っているということを導いている。(8b,c,d) についても、話し手が
直接把握した内容や様子から、別の事態を導いているといえよう。このように、
近世後期江戸語においては〈推定〉が見られるようになっている。

〈推定〉は〈感覚的描写〉から派生した用法と考えられる。〈感覚的描写〉は
「どういうわけか (よくわからないが)」という疑いを表明することで、話し手
の把握した事態を不確実なものとして述べることを表すものであった。このと

き、その背後に存在する事態を想像することで、ものごとをよりよく理解しようとすることがある。たとえば、〈感覚的描写〉の例である (5) では、それぞれ直接把握した事態として、顔色が悪いこと (5a)、見たことのある字であること (5b)、着物の手触りが違うこと (5c) が述べられていたが、それらの事態から、具合が悪い、誰々の書いた字である、誰々の着物であるという判断を下すことは容易に行われるだろう。そのように、直接把握される状況から、その背後に存在する事態を見出して述べることとなったものが (8) のような〈推定〉であると考えられる。

ただし、注意したいのは、現代語と異なり、近世後期江戸語では〈感覚的描写〉の例もある点である。

- (9) a. 北八「コレ――。おれをこゝにおいてどぶする。エ、それに、とんだことをいやアがつて、どぶやらきみがわるくなつた。コリヤたまらぬ―― (東海道中膝栗毛1802-1814・5編・上)
- b. 点「イエサ、お頭をお洗なさる所を見うけましては、私共もどうやら洗たう成ます。ハ、ハ、ハ (浮世風呂1809-1813・4編・巻上)
- c. 蝶「ア、どうぞこれから姉さんや私の力になつてくださいませ。まことにモウ心ぼそくツてなりませんといふは、どうやら身勝手らしく聞ゆれど、これへつらひなき娘の人情にて憎べからず。(春色梅児誉美1832-1833・3編・巻9)

気味が悪いという感情、洗いたくなるという願望、身勝手のように聞こえるという印象はいずれも直接把握された事態であろう。このような例も見られることから、近世後期江戸語における「どうやら」は、現状を描写するという性格をいまだ保っていると考えられる。^(注7)

2.3. 近代以降

近世後期江戸語において、〈感覚的描写〉から〈推定〉が派生し、「どうやら」は〈推定〉の副詞として第一歩を踏み出した。そして、近代以降、「どうやら」は〈推定〉の性格をさらに強めていく。

『太陽コーパス』を調査したところ、この時期の〈推定〉については質的な面で次のように注目すべき点が見られた。(10) は現在の眼前状態から導くのではなく、現場から離れて思考の中で導いた事態を述べる例である。

- (10) 先帝は長期間王位にあられたのみならず、能く礼儀を重んじ、事に柔和で且つ貴族的の態度を失はなかつたから、大に国民の敬慕する所となつて

居たなれど、之れを今日に比すれば、現皇帝はどうやらソレ程の敬慕がな
いらしい。(日下部三九郎(談)「名士の瑞典諾威観 平和の瑞典」1909年
16号)

また、(11a)(11b)は岡部(2011)が〈原因推定〉と呼ぶ、推定内容が過去の
事態の例である。なお、推定内容が過去の事態であるものは明治期(1895年、
1901年、1909年)では見られず、大正期(1917年、1925年)で見られた。

- (11) a. 態度曖昧であつた陸榮廷、陳炳琨が、どうやら中央反対に決して、
軍を湖南に進めると云ふ段取りになつた様だ。(摩天楼「編輯机上」
1917年10号)
- b. 『妾^{わたし}の知^{しり}己^{あひ}でございます。もしや死んだのではございませうまいか?』
お錦^{きん}は不安に耐へないやうに、トン公の上へ身をかゝめた。若侍は
脈を見たが、『大丈夫でござる。生きて居ります。どうやら氣絶をし
たらしい。』(国枝史郎「長篇小説 馳つかひ(第三回)」1925年11
号)

このような例が見られるということは、「どうやら」が現状を描写するという性
格から離れて、現状を解釈するという性格を強めつつあるということであろう。

「どうやら」の変化は意味用法の量的な分布からもうかがえる。『太陽コーパ
ス』において本稿で考察対象とした「どうやら」は54例見られたが、明治期
(1895年、1901年、1909年)では〈感覚的描写〉18例、〈推定〉5例であるのに
対して、大正期(1917年、1925年)では〈感覚的描写〉9例、〈推定〉22例で
あった。明治期に比べ、大正期において〈推定〉を表す例の割合が増えており、
明治期、大正期を通して、「どうやら」は主たる用法を〈感覚的描写〉から〈推
定〉へと変えていっている。事態をそのまま言語化したものであるか、ある事
態から別の事態を導いたものであるかは必ずしもはっきり区別できないため、
用例の解釈によって数値が多少前後する可能性はあるが、そうだとした場合に
〈推定〉に偏っていくということはいえるだろう。

この変化はさらに進み、現代語の「どうやら」は〈感覚的描写〉を表さなく
なっている。『新潮文庫の100冊』における1940年代生まれの作家の作品では、
本稿で考察対象とした「どうやら」56例全てが〈推定〉と解釈できるものであつ
た。なお、共起する形式は「らしい」「ようだ」「みたいだ」が多数を占め、「ら
しい」(「らしく」「らしかった」なども含む)26例、「ようだ」「みたいだ」(「よ
うで」「ようだった」なども含む)22例であった。また、「ようだ」は〈推定〉
だけでなく〈様態〉も表すが、「どうやら」が用いられた場合は、解釈が〈推

定〉に定まるという点も注意しておいて良いだろう。^(注8)

3. 「どうやら」の歴史的変化の背景

3.1. 〈推定〉の発生と変化の一般性

前節で、近世前期上方語において〈感覚的描写〉を表していた「どうやら」が、近世後期江戸語において新たな用法として〈推定〉も表すようになり、さらに、近代以降〈推定〉への偏りを見せ、〈感覚的描写〉を表さなくなっていくことを見てきた。このような「どうやら」の歴史的変化にはどのような背景があるのだろうか。

まず確認しておきたいのは、現状を描写する形式から、現状を解釈する形式への変化が起こりやすいという点である。このような変化については、「げな」「そうだ」「ようだ」「らしい」「模様だ」など複数の形式で起こっており、文法変化として一般性のあることが知られる（青木2007、岡部2011、川島2017）。上記の形式は広義の近代語に見られるものだが、古代語においても、終止形接続の「なり」が、事態を聴覚的に把握したことを表す意味から、その背後に存在する事態を導く意味を派生させている（小柳2013）。このように、近年の様々な研究によって、把握した事態をそのまま描写するものから、その背後に存在する事態を見出す意味が生じるという変化が繰り返し起きていることがわかってきている。「どうやら」の意味変化もこの一般的傾向に沿うものである。

ここで注意したいのは、この変化が述部形式に限られるものではなく、副詞においても起きているという点である。川瀬（2014）では「どうも」が〈感覚的描写〉から〈推定〉を派生させていったことを論じた。「どうやら」と「どうも」に見られる意味変化は、把握した事態をそのまま描写するものから、その背後に存在する事態を見出す意味が生じるという変化が副詞においても一般的なものであるということを示している。

3.2. 〈感覚的描写〉の衰退と類義語の影響

一方で、変化の個別的な側面にも留意する必要がある。「どうやら」は〈感覚的描写〉が衰退しているが、これは類義語との関連において捉える必要がある。とくに不定語と助詞によって構成されるという点で語構成的に共通する「どうも」「何か」「何だか」の存在を指摘したい。

「どうも」は近世前期上方語では（12）のような不可能を表す（不可能の意味が読みこめる）述語との共起にほぼ限られていたが、近世後期江戸語では共起

する述語が拡張し、(13) のような〈感覚的描写〉も表すようになる。

- (12) ヤア新六様さっきは御出でなされた。預りの八百目只置くよりはと。
少し手廻致し急にはどうも調はぬ。一兩日待つて貰ひましょ。(大経
師昔暦1715・巻下)

- (13) 通り者 手のごい、おれがやろ。(中略) ぐつと、これで心持がよ
くなる。ふかしやらんか。どふもやぼな形だぞ。(遊子方言1770・発
端)

「どうも」の〈感覚的描写〉と「どうやら」の〈感覚的描写〉が全く同じという
わけではないが、近世後期江戸語において、「どうも」が「^(注9)どうやら」と意味的
に近い用法も持つようになっている。

さらに、「どうも」以外に「何か」「何だか」なども新たに近世後期江戸語で
〈感覚的描写〉を表すものとして用いられるようになる。近世後期以降、江戸語
において不定語に下接する「か」(不定の「か」)が一般化し、勢力を伸ばして
いく(此島1966)。「何か」「何だか」はその中で見られるようになる語形であ
る。次の例は、「どうやら」の初期の例のように、「どういうわけか(よくわか
らないが)」という疑いが「何か」「何だか」によって付け加えられている。

- (14) a. しあん 何かむしやうにきれへでござりやす。(通言総籙1787)
b. アイサ、もう、何だかいろ〜目出度事が重つてね。(浮世風呂1809-
1813・2編・巻下)

このように、近世後期江戸語においては、「どうやら」以外に〈感覚的描写〉
を表す形式が複数現われる。近代以降、「どうやら」が〈感覚的描写〉を衰退さ
せ、〈推定〉へ偏っていったのには、これらの形式が〈感覚的描写〉を担うこと
も影響していると思われる。

3.3. 「どうか」の史的変遷との関係

近世後期江戸語においては、不定語「どう」に不定の「か」が下接した「ど
うか」という語形も出現する。「か」が「やら」と同じく疑いを示す助詞である
ことを考えれば、「どうやら」の史的変遷を捉えるうえで、「どうか」との関係
も見ておく必要がある。

まず「どうか」の意味用法を確認しよう。「どうか」には「どうやら」と同じ
ように〈感覚的描写〉や〈推定〉で用いられている例が見られる。

- (15) a. (泊まっている宿で幽霊が出るという話をあんまから北八が聞いている
場面) 北八「ソリヤアどこで あんま「しかもソレおまいのうし

ろのゑんさきで 北八「ヤアコリヤたまらぬ。どふかくびすじがぞく〜するよふだ」(東海道中膝栗毛1802-1814・3編・下)

b. あすかの ほんに、いつものよふに元氣もござんせん。どふか顔のいろもわるいよふでござんす。(傾城買二筋道1798)

c. 犬市「ハアなるほど、水のおとがよつほどはよい トいゝつゝ、石をひろい、川のなかへなげこんでかんがへ 犬市「イヤこゝらが、どふかあさいよふだ」。(東海道中膝栗毛1802-1814・3編・下)

(15a) は〈感覚的描写〉のうち内的な感情や感覚を表すもの、(15b) は〈感覚的描写〉のうち外的な状況を表すもの、(15c) は〈推定〉の例である。このように、近世後期江戸語において「どうやら」と似た意味を表す「どうか」が新(注10)しく生じている。

近世後期江戸語以降、不定の「か」が勢力を伸ばしていくことを考えれば、その流れの中で「どうやら」が「どうか」にとってかわられてしまう可能性もあったはずである。しかし、そうはならなかった。「どうか」はその後「どうやら」から意味的に離れていくのである。たとえば、『春色梅児誉美』や『小袖曾我薊色縫』など、天保以降に成立した資料では、任意の手段によって事態の実現を強く望んでいることを表す次のような例が目立つ。

(16) a. 白蓮「イヤ、まだ身を投て間がねへ様子。どうか助てやりてへものだ。御苦労だが引上げてくれ。」(小袖曾我薊色縫1859)

b. 藤「そりやアマアとんだ苦労な身のうへだ。可愛そうに。しかし案じねへがいゝ。是からおれが姉御にあつて、どうか婆ばあが方くひきつを引離てやろふ」(春色梅児誉美1832-1833・3編・巻8)

c. よね「何の支たくがありますものか。着物を端折はしよるばかりだはネ。それじやア最何も用はありませんかへ。アノネ私がまた来るまで、不自由もふなものがあるならどふかして、使をよこしてお呉なさいヨ。(春色梅児誉美1832-1833・初編・巻1)

(16a) は願望表現、(16b) は意志表現、(16c) は「どうかして」の形で行為指示表現と共に起した例であり、いずれも事態の実現を強く望んでいることを表している。これは「どうぞ」の成立初期(近世前期上方語)の意味用法に近い。このように「どうやら」を脅かす可能性のあった「どうか」は意味的に「どうぞ」に近くなっていく。「どうやら」が生き延びて〈推定〉を表す副詞として確立した背景には、こういった「どうか」の史的変遷もある。

最後に、もう一つ触れておきたいことがある。それは「どうか」が表すことと

なった事態の実現を強く望む意味が〈感覚的描写〉や〈推定〉から直接的に派生するとは考えにくい点である。ここで注意されるのが、不定の「やら」「ぞ」「か」の関係の変化である。不定の「か」には疑いを示すのではなく、任意の要素を示す機能が前面化したものもある。これは不定の「ぞ」と通じる性格である。

- (17) a. おまはんに何ぞおいし^{なん}ひ物でもたべさしたひネ。(春色梅児誉美1832-1833・初編・巻1)
b. それより今にひらいわが何^{なに}か持て来るはずだ(春色梅児誉美1832-1833・3編・巻8)

いずれの例も、ある集合に属する要素を指示しており、「何ぞ」と「何か」はほぼ同じ意味を表している。不定の「か」が発達していく中で、このような「ぞ」と「か」の関係が意識されるようになって、「どうか」が「どうぞ」の類義語になったのだと思われる。^(注11)

4. まとめ

本稿は不定語と助詞によって構成される副詞の一つである「どうやら」について、その周辺も考慮して史的変遷を明らかにした。

成立初期である近世前期上方語において〈感覚的描写〉を表していた「どうやら」は、近世後期江戸語において〈推定〉も表すようになり、さらに、近代以降〈推定〉へ偏りを見せ、現代語においては〈感覚的描写〉は表さなくなっている。このような「どうやら」の歴史的変化の背景として、意味変化の一般的傾向、類義語の影響による〈感覚的描写〉の衰退、「どうやら」の類義語から「どうぞ」の類義語となることで結果として「どうやら」を脅かさなくなるという「どうか」の史的変遷が指摘できる。

3.3の考察から示唆されるように、「どうやら」の史的変遷は「どうぞ」「どうか」などの史的変遷とあわせて、不定の「やら」「ぞ」「か」の歴史的推移と関わる問題でもある。ただし、本稿では不定語と助詞によって構成される副詞の史的変遷と不定の「やら」「ぞ」「か」の歴史的推移との具体的な関係性については十分に論じられていない。今後の課題としたい。

(注1) 「どうやら」について、現代語の意味用法を記述したものとしては、森田(1989)、飛田・浅田(1994)、森本(1994)、張(2003)、杉村(2009)、木下(2010)などがある。小池(2008)は歴史的観点からの考察ではあるものの、時代が明治期以降に限られており、また、「どうやら」が〈推定〉を表す副詞であることが前提とされている。

- (注2) 森田(1989)では現代語における「どうやら」の用法として〈推定〉の他に、「のたれ死にもせず、どうやら海外旅行を終えることができました。」のように、「どうやら……た」の形で手段や方法はどうであれ、ある事態が実現に至ったことを述べる用法があげられている。本稿ではこの現代語の「何とか」に近い用法については考察の対象外とする。
- (注3) 尾上(2001)に、「なにか(どこ)かのさびしいところがある」「なにやら(どうやら)一大事がおこったらしい」「誰を待つやら 銀座の街角 時計ながめてそわそわにやにや」などの例に対して、「—が不明である」という意味として述定的に働き、そのことから二次的に後続文との間にある種の文章論的な関係をも持つに至る場合がある」(尾上2001: 136)という指摘がある。また、田中(1983)では、「どうやら」「どうも」「何だか」に「“はっきりとはいえないが”という断り書き的な意味を表すものとして消極的である」(田中1983: 87)という性格を見てとれることが指摘されている。「どうやら」についていえば、これらの指摘はとくに初期の用法に当てはまると思われる。
- (注4) 〈感覚的描写〉という名付けは古代語の終止形接続の「なり」について論じた仁科(2007)の用語を借りたものである。
- (注5) 次のような例である。
- にわかの事で御^ござつたによつてわたくしもおぼつかなふ御^ござりましたが
どうやらこふやらまをあわせました (好色伝受1693・中 八幡大名)
- おそらくこのような「どうやらこうやら」が「どうやら」という形でも用いられるようになって、注2で示した「どうやら」の用法につながっていくのではないかと思われるが、別途検討が必要である。
- なお、調査範囲内では次に示すような疑問文の例(「どのように書くのか」と解釈できる)も1例見られたが、特殊な例であろう。
- さる人、くわんおんのをんの字ハ、どうやらかくといひければ、(露新軽口はなし1698・巻4)
- (注6) この区別は岡部(2011)による「ようだ」の意味用法の分類における〈内的感覚〉と〈様態〉の区別を参考にした。
- (注7) 岡部(2011)では、江戸語の「ようだ」は「現状描写性」の側面が強いのに対し、現代語の「ようだ」は「現状解釈性」の側面が強いとしている。「どうやら」においても同じようなことが指摘できる。
- (注8) この点については木下(2010)に指摘がある。
- (注9) さらに「どうも」は〈感覚的描写〉から派生して〈推定〉も表すようになる。先に述べたように、この点に注目すれば「どうやら」と「どうも」には共通する変化が起きているといえるが、「やら」と「も」の違いを反映して多くの違いがあるという点にも、当然注意が必要である。「どうも」の意味用法、および用法発生の論理についての詳細は川瀬(2014)を参照されたい。
- (注10) 江戸語において「どうやら」に相当する「どうか」があることは湯澤(1954)に指摘がある。ただし、〈感覚的描写〉と〈推定〉の違いについては触れられていない。
- (注11) その後「どうか」は明治期に行為指示の副詞として成立する(齊藤2009)。「どうぞ」の歴史的変化、および明治期以降の「どうぞ」と「どうか」の歴史的関係については川瀬(2015)を参照されたい。

調査資料

用例検索にあたり、国文学研究資料館の本文データベース検索システムを利用させていた。引用にあたっては、ルビの省略、旧字体を新字体にするなど、表記を私意に改めた箇所がある。

【上方】

中世末期～近世前期：天草版平家物語（近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ編『天草版平家物語語彙用例総索引』勉誠出版）／エソポのハプラス（大塚光信・来田隆編『エソポのハプラス 本文と総索引』清文堂出版）／日葡辞書（土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店）／虎明本狂言（池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇 上中下』表現社）／好色伝受（坂梨隆三他編著『好色伝受 本文・総索引・研究』笠間書院）／武藤禎夫・岡雅彦編『嘶本大系』東京堂出版（第1巻から第8巻まで）／西鶴浮世草子、近松浄瑠璃（『日本古典文学大系』岩波書店所収作品）

近世後期：穿当珍話、新月花余情、聖遊郭、陽台遺編、姪閣秘言、月花余情、原柳巷花語、郭中奇譚、風流裸人形、短華薬葉、粋のすじ書、北華通情、うかれ草紙、阿蘭陀鏡、十界和尚話、身体山吹色、南遊記、嘘の川、竊潜妻、当世廓中掃除、粋の曙、箱まくら、色深狭睡夢、北川蜆殻、風俗三石土（『洒落本大成』中央公論社）

【江戸・東京】

近世後期：黄表紙、洒落本（『日本古典文学大系』岩波書店所収作品）／浮世風呂、東海道中膝栗毛、春色梅児誉美、小袖曾我薊色縫（『日本古典文学大系』岩波書店）／七偏人（早稲田大学図書館蔵本）／春色恋廻染分解（浅川哲也編著『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』おうふう）

近代以降：国立国語研究所編『太陽コーパス——雑誌『太陽』日本語データベース——』博文館新社（翻訳作品を除く）／『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社（翻訳作品を除く）

参考文献

- 青木博史（2007）「近代語における述部の構造変化と文法化」青木博史編『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房
- 岡部嘉幸（2011）「現代語からみた江戸語・江戸語からみた現代語——ヨウダの対照を中心に」金澤裕之・矢島正浩編『近世語研究のパスpekティブ——言語文化をどう捉えるか』笠間書院
- 荻野千砂子（2003）「不定詞「ドウ」の発達」『語文研究』96
- 尾上圭介（2001）『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
- 川島拓馬（2017）「文末形式「模様だ」の成立と展開」『日本語の研究』13-3
- 川瀬卓（2014）「近世における副詞「どうも」の展開」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究2』ひつじ書房
- 川瀬卓（2015）「副詞「どうぞ」の史的変遷——副詞からみた配慮表現の歴史、行為指示表現の歴史——」『日本語の研究』11-2
- 木下りか（2010）「副詞ドウヤラと判断の焦点化」『大手前大学論集』10
- 小池康（2008）「近現代における「推定」のモダリティ副詞の変遷——ドウモとドウヤラを中心に——」『日本語と日本文学』46
- 此島正年（1966）『国語助詞の研究——助詞史の素描——』桜楓社
- 小柳智一（2013）「文法的意味の源泉と変化」『日本語学』32-12

- 齊藤瑛子 (2009) 「副詞「どうか」「どうぞ」における依頼用法の成立過程」『国語語彙史の研究』 28
- 迫野虔徳 (2002) 「指示詞におけるコソアド体系の整備」『語文研究』 94
- 杉村泰 (2009) 『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ 副詞の研究』 ひつじ書房
- 田中敏生 (1983) 「否定述語・不確実述語の作用面と対象面——陳述副詞の呼応の内実を求めて——」『日本語学』 2-10
- 張根壽 (2003) 「証拠性判断を表す副詞について——「どうやら」と「どうも」を例に——」『日本語と日本文学』 37
- 仁科明 (2007) 「『終止なり』の上代と中古——体系変化と成員——」青木博史編『日本語の構造変化と文法化』 ひつじ書房
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』 くろしお出版
- 柳田征司 (1978) 「『ドウ』(如何)の成立」『国語と国文学』 55-5
- 山口堯二 (1990) 『日本語疑問表現通史』 明治書院
- 山口堯二 (2000) 『構文史論考』 和泉書院
- 湯澤幸吉郎 (1954) 『江戸言葉の研究』 明治書院

【付記】 本稿は平成24年度九州大学国語国文学会（2012年6月3日、於九州大学）、および日本語学会2015年度春季大会（2015年5月24日、於関西学院大学）での発表をもとに加筆修正したものである。発表席上または発表後、多くの貴重なご意見を賜った。心より感謝申し上げるとともに、十分に活かしきれなかった点もあることをお詫びする。本研究はJSPS 科学研究費（課題番号24820004、および課題番号16K16840）による研究成果の一部である。

（かわせ　すぐる・弘前大学人文社会科学部講師）